



中高生とともに差別と闘う

『モシカシテブラクノコ』

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



「モシカシテブラクノコ」

前号で、急逝したHさんのことについてお話ししました。そのHさんとの思い出の中で、どうしても外せない事件があります。「ポケベル差別事件」です。

マキの妹、ユキが中学生になったとき、起こるべくして起こった事件であり、同和担当教員をしていた私としても、またイチ教員としても痛烈に反省させられた事件でした。

ある日の夜、家に帰っていたユキに、新しくできた友達からメッセージが送られてきたことが事の発端でした。「モシカシテブラクノコ」

ユキは「ドキッとした」「驚いた」と言います。そのメッセージはきょうだいに見せられ、お母さんにも見せられました。

「どういうことだ?」

すぐに学校に連絡があり、翌日から、本人への聞き取りが始まりました。そのメッセージを送ってきた子は、つい最近転校してきたばかりの女の子でした。

当時その学校では、部落問題学習はそれこそオープンに取り組まれていました。差別の厳しさやしんどさはありませんが、それでも持ち前の明るさや元気で、いきいきと、当たり前のように自分の立場が語られていました。そんな学習のまっただ中に転校してきたわけです。

その女の子、部落問題学習で何が話されているのかまったく分からず、

相当戸惑ったと言います。それはそうです。前にいた学校ではほとんど学習されていなかったわけですから。ですから、素朴な疑問として素直に、新しく知り合ったユキに、冒頭のメッセージを送ったというわけです。

事件の問題点

送った女の子に罪はあるのか?

ないわけはありません。たちまちユキやきょうだい、家族を動揺させ、心配をかけたわけですから。けど、それはまだ小さいといえます。より罪が重いのは、どうしてそんなメッセージが安易に送れる子になってしまったのか、ということです。つまり、それまでその子にどれだけの大人がどんな関わり方をしてきたのか、ということなのです。

これは、何度かの確認会と糾弾会で明らかになっていきました。

一、地区のあるなしに関わらず、どの学校でも内実ある部落問題学習が行われていたのか

二、転校した生徒に対し、当事者の立場に立ったていねいな対応ができていたのか

三、仲間づくりの視点に立った教育活動となっていたのか

これらの視点で、転校前と後の教育委員会、学校関係者、保護者が一堂に会しながら問題点が確認・認識され、全体として改善策が練られていきました。

ところがその間、当事者の父親で

あるHさんは、終始落ち着いた冷静な対応だったように記憶しています。厳しさのなかにも冷静な分析力、弱者の視点に立った、本当のやさしさを兼ね備えた方でした。

そんなHさん。最後にお酒を飲んだとき、しきりに言っていたのは、「寛容」という言葉でした。「おかしい」と思ったことには激しさをもって追求できるHさんの言葉とは思えません。問の本質として、自身がたどり着いた境地だったのかなと思います。

「寛容」——。私が胸に刻んだ言葉でした。

宿題「理系の人は差別しないか」

家族葬だったため、後日お焼香に、ご自宅に伺いました。これまでのような話を懐かしくした後、お暇する直前になって、同席していたマキの近況について話が出ました。結婚をして子どもを二人授かり、車で一時間ほどのところで暮らしているとのこと。

「相手の人には、マキの立場をちゃんと伝えてくれるの?」

と訊くと、

「今さら言わなくてもいいんじゃないかなと…。それに、理系感覚の人で物事を合理的に考える人だから、差別するようなこともないかなと…」

これ、よく聞かれるフレーズです。

「理系で合理的な人だから」
では、理系の人は絶対に差別をしないのか。みなさんはどう思われますか?

私はそんなことはないと思っています。それとこれとは別問題。いくら理系で合理的な考えを持っていても、差別するときはします。人は「知」とは別に、「情」で動く部分があるからです。

転居で知らない土地に引越してきたとき、知り合った周囲の人から、近くにある地区を指して、差別的な噂話をまことしやかに聞かされたと言います。パートナーもサラッと聞き流していたと。しかし、それが少しずつ積み重なっていけば、どうでしょう。

差別意識は、透明な水に一滴のインクを落とすようなものです。一滴ではさして変わりはありませんし、変化に気づくこともありません。でもそれが一滴一滴と染み込んでいけば、いずれ濁っていきます。差別意識はそんなふうで、いつの間にか忍び込んでくるものです。ましてや我が子がこれからの成長の中でどんな学びをしていくのか分かりません。ネット社会に囲まれた現代社会ならなおさらです。

「絶対に言っておかないといけない」
お母さんは強くマキに迫りました。マキは困った表情を浮かべていました。

後日マキに連絡をすると、

「妹にも相談してみようと思います」
とのことでしたが、果たして口に出せたかどうか…。

これから見守っていこうと思えます。Hさんからたくさんのお話を学ばせてもらった宿題として。合掌。

イラスト 中島 亜唯